

美術工芸資料館寄贈資料について

美術工芸資料館の収蔵資料の核は、いうまでもなく、開学以来、教育・研究のために収集されたさまざまな美術工芸品である。そのなかには、ロートレックやクリムトのポスター、アールヌーヴォー期の陶磁器類など、いまや貴重な「芸術作品」として認知されているものも多く含まれている。また、予算の許す範囲で折に触れて購入した資料もある。そして、それらに加えて貴重な収蔵品となっているのが、さまざまなかたちで寄贈・寄託を受けた資料類である。

資料の受贈については積極的に受けてゆくという基本方針ではあるが、もちろんどんなものでも受け入れるわけではない。収納スペースの問題が大きい、限られたスタッフで資料を整理し、その意義を正しく評価して展示公開に活用するという観点から考えても、受け入れ可能なジャンルは限られる。美術工芸資料館では、第一に、前身校である京都高等工芸学校関係者に関連する資料類を、そして、第二に、前身校以来の本学のテーマである、京都の伝統産業の近代化に関する資料類を受贈の中心にしている。以下、近年受贈したおもな資料類を紹介してゆきたい。(以下の記述はすべて敬称略)。なお、建築関係は、村野藤吾関係資料がひろく知られているほか、近年では椎原兵市関係資料も寄贈を受けている。さらに、2010年には谷川俊太郎ラジオコレクションの寄贈を受けているが、ここでは、近年収蔵された美術工芸関係の資料類を紹介することとした。

本学関係者に関して言えば、京都高等工芸学校初代校長中澤岩太、2代目校長鶴巻鶴一関係資料を2015年度、2016年度に相次いで寄贈を受けた。東京在任期から狩野派の絵師に絵を学んでいた中澤岩太が所持していた絵手本類と、化学者であると同時に染色作品も手がけた鶴巻鶴一が制作した帯などの作品であり、いずれも、化学と芸術の融合を示す資料である。

初期の教員関係で大きな位置を占めるのが、初代図案科教授である浅井忠が早すぎる晩年に祇園石段下に開いた陶器店九雲堂関係の資料である。京都で図案指導をはじめた浅井は、図案科での教育以外にも遊陶園、京漆園といった工芸の研究団体をつくって若手の作家に積極的に新しい感覚の図案を提供し続けた。そして、明治40年(1907)9月に、みずからの図案を絵付けした茶碗や小皿などを売る店を開いた。浅井が京都の伝統工芸界に対して、新しい図案だけではなく、流通という側面からも変革をおこなおうと考えていたことがわかる。しかし、この明治40年の暮れに、浅井は風邪をこじらせて急逝することになる。

寄贈資料は、この九雲堂で扱っていた急須、湯呑、皿、徳利などの陶磁器類で、その多くには「九雲」の銘がはいっている。そして、もっとも重要な資料が、「浅井先生図案帖」(写真1)である。浅井が九雲堂で販売する陶磁器のためにつくった図案の下書きを貼り込んだ画帖で、浅井の図案制作のプロセスがわかる貴重な資料である。なかには○がついた図案があり、それが実際に製品化された陶磁器も資料に含まれている。

浅井忠の従兄弟で、浅井の絵に憧れて洋画家となり、浅井の京都高等工芸学校赴任とともに京都に来て、同校の講師となった都鳥英喜の関係資料の寄贈も受けた。都鳥自身の洋画も貴重であるが、それに加えて、都鳥がヨーロッパから持ち帰ったミュシャ(写真2)やシエラなど多くのポスターが含まれている点で貴重である。これらのポスターは、折りたたんで持ち帰り、そのままたんであったと思われる、折れが非常にきつく、破れているものも多かった。そのうちの主要作品については、2018年度にクラウドファンディングにより修復することができた。なお、都鳥資料は現在でも登録作業が続いている。



写真1

に帰国。以後、東京で活躍をした。牧野資料のなかには、東京時代の資料も含まれており、幅広い活動の様子がわかる。

一方、霜鳥はニューヨークで牧野のアシスタントをつとめたのち、アメリカ自然史博物館で標本模型の制作に携わった。また、デザインも学んでいる。大正9年に帰国して、京都高等工芸学校図案科の講師になり、翌年には教授となり教鞭をとった。洋画家であるが、京都のデザイン界でも指導的な立場であった。資料のなかには数多くのデッサン(写真3)が含まれており、霜鳥の制作の一端を知ることができる。

また、京都市美術工芸大学(現在の京都市立芸術大学)卒業後に京都高等工芸学校図案科に入学し、その後、松坂屋図案部などを経て、昭和24年(1949)に新制大学として発足した際に本学に助教として赴任した福永俊吉関係の資料も受贈している。なかでも興味深いのは、福永の絵と同僚であった河本敦夫と土居次義が賛を加えている一軸で、当時の教員間の交流の様子を知ることができる資料



写真2

である。なお、日本美術史家の土居次義の膨大な調査ノートと資料写真は2009年に本学に寄贈され、それぞれ附属図書館、美術工芸資料館で保管している。土居の調査ノートは近年注目を集めており、2020年には、東京国立博物館企画展示室で、同じく日本美術史の研究者である田中一松などのノートとともに展示された。以上が本学の教員関係のおもな寄贈資料である。これら寄贈資料のなかには、京都高等工芸学校での写真類や講義ノートなども含まれており、それらについては、現在附属図書館で進めている大学史アーカイブの資料としても蓄積してゆく予定である。

料群である。図案家の寺田哲朗に関する資料は、図案下絵を中心として見本裂や関連道具など多岐にわたっており、これまでもにも展覧会で活用して、さらなる資料の寄贈に結びついている。あらたに寄贈されたなかで最大のものが、1960年代を中心に京都で大量に生産していたアフリカ向け衣料で、知られざる京都の文化として近年注目を集めることとなった。寺田資料、アフリカン・プリントについては、2019年、2020年と相次いで出版というかたちで研究成果を披露することができた(『アフリカン・プリント―京都で生まれた布物語―』青幻舎、2019年、『近代図案帖―寺田哲朗コレクション―』に見る、機械捺染の世界』青幻舎、2020年)。

以上のように、美術工芸資料館の収蔵資料は、初期の教育・研究資料を核として、徐々に広がり続けている。本学の教育・研究の成果や発展の歴史を視覚的にもがたる資料として、これからの資料の保存管理につとめ、また、さらなる充実をはかってゆく必要があるだろう。



写真3